

第71回埼玉県美術展覧会 審査評

【第6部 写真】

審査主任 ますだ ひろかず
増田 裕一

第71回展は、応募総数1,001点、入選点数458点、入選率にして45.8%となりました。

今回のトピックとしては、単写真の規格が変更され、パネル全面の写真や変形サイズの単写真が出品されたこと、親子同時入賞があったこと、高校生の入賞があったこと、高校生奨励賞が新設されたことなどがあげられます。また、上位の作品にはそれぞれに独自の表現があり力作ぞろいでした。審査は4次まで行われ、討議も交えて厳正に実施しました。

最近のニュースで「AI 作成画像が有名写真コンテストで最優秀賞を獲得」というものがありました。19世紀に写真の発明が絵画に影響を与えたこと以上に、生成AIが写真に与える影響は大きなものになるのではないのでしょうか。それだからこそ既存の価値観をなぞるのではなく、個人のまなざしを大切に、新しい表現を求めていく必要があるのかもしれませんが。来年度も個性豊かな作品がたくさん応募されることを期待しています。

○埼玉県知事賞

しんかい かとう しゅう
「深海」 加藤 秀

異国の地でしょうか。日本から遠く離れた風景のように感じます。夜が明けきらぬ広大な荒野を、一台のトラックが走っています。それは画題が示唆するように、光のささない「深海」を潜水艇がさまよっているようにも見えます。道や山を配した画面の構成力が確かで、包み込むようなスケールの大きさを表現しています。そして画面の多くを占める青の色調と、トラックから放たれるオレンジ色の光は、見る者の心にいろいろな思いを呼び起こします。創造性があり、神秘的でとても美しい写真です。

○埼玉県議会議長賞

もとむ みやざき まさよ
「求」 宮崎 雅代

プリントがしっかりしていて、色調に統一感があります。神社を素材にした6枚の写真が並んでいますが、上下2段の流れがスムーズで配置の仕方が見事です。この組写真のポイントは、上段真ん中の揺れる炎ではないかと思います。揺れる炎が他の5枚へと波及して、作者の願いや揺らぐ気持ちを表しているかのようです。撮影の段階から組写真が念頭にあったのでしょうか。完結しすぎない6枚の写真を使って1つのイメージを表現しています。組写真のお手本のような作品だと感じました。

○埼玉県教育委員会教育長賞

こうみょう かねこ まさき
「光明がさす」 金子 政喜

この3年間、私達の生活はコロナにより苦しめられ続けました。しかし、やっと出口が見えてきた今このときの写真です。風に揺れる3枚のマスク、爽快感にあふれる青空、そしてそこから差し光。とてもシンプルな写真ですが、空を見上げている作者の開放感溢れる表情が見えるようです。差し込む光は希望を表しているのでしょうか。説明的に表現するのではなく、鑑賞者に想像して感じてもらうことで成立しています。写真表現とはこういうことだと教えてくれる作品です。

○埼玉県美術家協会賞

「桜樹の祈り」 野本 照子

今回展から単写真の規格が変更となり、それにより自由な発想を持って実現した作品です。長辺を長くしたパノラマサイズのプリントが新鮮です。このサイズにしたことにより、桜の枝の広がり強調されているように思います。樹の根元には、手を合わせた人が小さく写っていて、祈りを捧げています。構図が見事で、しっとりした色調に仕上げることにより、この桜の樹に神が宿るほどの荘厳さが見て取れます。従来の桜の表現とはひと味異なる重厚感溢れる美しい作品に仕上がっています。

○埼玉県美術家協会賞

「夕暮れ時」 一瀬 邦子

夕暮れ時をテーマにした4枚の組写真です。駅の周辺でしょうか。その日常を、肩に力を入れることなく、淡々と表現しています。だからこそプリントには細心の注意を払う必要があるのですが、見事なプリントで作者の力量が感じられます。4枚組は起承転結になぞらえられることがよくあります。この作品の場合、「転」の位置に猫がいることが重要だったのではないのでしょうか。そのことにより、同じような画面の重複を避けることができ、イメージをぐっと広げています。まとまりのよい優れた作品だと感じます。

○埼玉県美術家協会賞

「夜明けの刻」 野本 昌寛

プリントサイズや名字が同じことから気になっていたのですが、「桜樹の祈り」で入賞した野本照子氏は、作者のお母様だそうです。親子で入賞とは、なんてすてきなことでしょう。

この写真のポイントは光です。やはりパノラマサイズを採用したことにより、光のラインが、長く綺麗に強調され、イメージを増幅しています。またプリントの技術もしっかりしていて、モノクロのグラデーションがとても美しく表現されています。この写真を見ていると、朝の凜とした空気に包まれているような気持ちになります。

○埼玉県美術家協会賞

「静寂」 青鹿 洋一

夜の雪景色を撮影した6枚組の組写真です。プリントの技術が確かであり、ピーンと張り詰めた冷たい空気感と無音の世界を見事に表現しています。「撮影は作曲であり、プリントは演奏である」と言った写真家でしたが、よい演奏をしなければ曲の良さは伝わりません。この作品もよいプリントを作らなければ、モチーフである雪の日の「静寂」を表現できなかったことでしょう。写真表現とプリント技術は表裏一体である、そのようなことを教えてくれる作品です。

○さいたま市長賞

「視」 ^{みやむら}宮村 ^{かりん}香凜

高校生の作品です。徹底的に対象物をそぎ落としたミニマリズムの写真のように見えます。シンプルな写真ですが画面の構成力が高く、そのセンスには驚かされるばかりです。横顔を向けたマネキンは何を見ているのでしょうか。視線を意識することにより、マネキンに命が吹き込まれ、作者の視線と同化しているのでしょうか。高校生が入賞したことをとてもうれしく思っています。卒業と同時に写真から離れてしまう人が多いのですが、今後も写真を撮り続けてほしいと願っています。

○さいたま市教育委員会教育長賞

「宇宙へのいざない」 ^{いおち}庵地 ^{のりこ}紀子

都会の夜の風景を撮った 4 枚組の組写真です。組写真には説明を極力排除してイメージを広めていくものが多いのですが、この作品は物語性が重視されています。それぞれの写真は、建物であったりオブジェであったりするのですが、まるで宇宙旅行に行くための施設にいるような気分にさせてくれます。色調が鮮やかなことが、そのような感覚にさせる重要な要素なのかもしれません。映画の一コマコマを見ているようで、わくわくさせてくれる作品です。

○読売新聞社賞

「メルヘン広場」 ^{ひろば} ^{こたに}小谷 ^{かずみ}和己

モニュメントの上からさす強い光が、現実世界と乖離したような印象をもたらしています。長く伸びたモニュメントの影、つま先を少しだけあげた女の子のフォルム、影の中にいる鳩などが三角形の構図の中で絡み合い、シュルレアリスムの絵画を見ているような気持ちにさせてくれます。カメラは客観的に現実を写しますが、写真には主観的な要素があって現実でないことを語ることができます。この光景をとらえた作者の、見る目の確かさを感じます。

○テレビ埼玉賞

「のぞき見」 ^み ^{さかもと}坂本 ^{のりこ}典子

ストレート写真の醍醐味が味わえる写真です。横一列に等間隔で若者が並び、全員がスマートフォンを見えています。それをキリンがのぞき込んでいます。巧みな画面構成で、ユーモア溢れる作品となりました。通り過ぎても不思議ではない光景ですが、これは写真になると思った作者の感性は素晴らしいと思います。全員が下を向いた瞬間を逃さずシャッターを切ったのでしょうか。何々のように見えるというのは写真の大切な要素かもしれません。作者の発見の目で、楽しい写真になりました。

○東京新聞賞

「浄土」 柳川 恭平

「浄土」という仏の住む清らかな世界を表現しようとした意欲的な作品です。左の写真は激しい雨、真ん中は蓮の生花、右は蓮の造花で構成されています。蓮の生花と造花は此岸と彼岸を表しているのでしょうか。表面的なバランスだけで並びを考えれば、左の雨が問題になりそうですが、この並びしかないという作者のこだわりがあるように感じます。雨は此岸（私達がいる世界）にある煩惱を洗い流す雨なのかかもしれません。難解ですが、作者の感情溢れる作品だと感じます。

○高校生奨励賞

「夢の中で」 野中 結衣

見た瞬間に笑顔になれる写真だと思います。カラフルな写真が6枚あり、小さく切り取られた本人の写真がコラージュされています。それはまるで夢の中の世界を自分が飛び回っているようです。背景は明るく仕上げられていて、夢の世界を強調しています。高校生らしいポップな作品です。このパネルを作っているときは、さぞ楽しかったのではないのでしょうか。これからも写真を楽しんでほしいと思います。

○埼玉県美術家協会会長賞

「晩夏」 小林 千津子

3枚目の向日葵を中心として広がっていく作品です。「晩夏」という画題ですが、ことさらに夏を象徴する写真を集めたわけでもなく、自分の中にあるイメージとしての夏の終わりを表現した作品だと思います。心象風景と言ってもよいのかもしれません。プリントの仕上がりも素晴らしく、白が効果的に強調され、ベテランの技量の高さを感じます。4枚の並び方も見事で、一貫して夏のけだるいような雰囲気の流れています。完成度の高い作品だと思います。

○高田誠記念賞

「ペルソナ都市」 入江 一男

都会のスナップ写真4枚で作られた作品です。一見すると作り込まれた写真のように思いますが、枝の先に見えるポスターの顔やコートにプリントされた顔など、すべてストレート写真です。加工などを排除した写真の力強さを感じます。都市をさまよいながら、瞬時にこれらの写真を撮影する作者の感性は、とても鋭いものだと思います。またペルソナ（仮面）という画題がついていることから、素顔を見せない都市生活への批評性を込めているのかもしれません。見事な作品だと感じました。